

ザ・ラグビー

City Matsuyama East High School Rugby Football Team



最古参の松中戦士 大西辰居 昭和9年卒
慶応義塾 関東稲代のフロントロー

ジャパンのアスリート 尾崎政雄 昭和30年卒
早稲田・八幡製鉄・オールジャパン

俊敏のラグビーが身上 和田憲明 昭和30年卒
青山学院 関東大学ラグビー出場

花園出場のフランカー 須之内辰雄 昭和46年卒
重量級揃いのフォワード 富士通勤務

四国大会優勝のSO 矢野良知 平成元年卒
NHK 報道局社会部勤務

高校オール愛媛に選抜 桐山雄臣 平成13年卒
慶応義塾 関東大学対抗戦にリザーブで

デザイナー・小椋勇記夫(532年卒) エディター・松崎伸一(557年卒)

はじめに

高校生の時、東高ラグビー部は愛媛県で最も伝統のあるラグビー部だと教えられた。しかし、その詳細については余り語られることはなかったように思う。

今回、たくさんのOBの方とお会いし、お話を伺った。初めて聞くエピソードだらけで驚いた。早稲田で活躍された先輩がいることは知っていた。でも日本代表の経歴を持っていることは知らなかった。さらにその20年も昔にニュージーランドチームと対戦したOBがいたなんて知る由もなかった。また、部員不足で苦しい時代を乗り切った人々の話は感動的であった。お会いしたOBの方は、皆さん熱かった。松中が、東高が、ラグビーが、彼らの心の中では当時のまま色あせずにいた。

こうした部の歴史を正確に後の世代に引き継ぐこと、OBの思いを伝えることは、部の財産となり、力となる。OBにとっては喜びでもある。今回、ほんの一部分ではあるが、そうした歴史・OBの思いを皆さんに紹介する。東高ラグビー部の益々の繁栄を祈ってのことだ。そしてまた、我らが母校、松中・東高の。

24年、学制改革により松山商と統合され松山東高となった。しかし、昭和27年には松山商が独立。当時ラグビー部には普通科の生徒が少なく、東高ラグビー部は存続の危機を迎える。この危機を救ったのは三輪田綱丸（昭和29卒）である。三輪田は熱心な勧誘で部員を確保するとともに、二宮晋二が昭和20年に逝去したため監督・コーチのいない中、自ら部員を指導して部の復興に力を注いだ。三輪田の尽力がなければラグビー部の歴史に空白の時代が生じていたかもしれない。それとこの時代に忘れてはならない人が、部長の稲川武男だ。今と違ってまだ大らかな時代、やんちゃな生徒が多く、問題を起こすことも多かった。そんな生徒達を陰になり日向になり支え続けたのが稲川である。奥深い愛情を持った稲川の指導には頭が下がる思いだ。

学制改革による部存続の危機を乗り切り、昭和29年には総体で初優勝を遂げる。昭和30年前後には、全国大会県予選決勝まで進出すること4度。しかしあと一步の壁を破ることができなかった。その後、昭和30年代半ば以降は徐々に力が衰えていく。3年生の中に受験勉強のために退部する者が現れだしたのもこの頃である。



昭和29年5月30日 堀之内ラグビー場
総体(7人制)初優勝
前列左から、大西、尾崎、作道、渡部(秀)。
後列左から川崎、横山、河本

そうした衰退期にあった東高に高橋俊三が赴任する。昭和36年のことだ。俊三はラグビー部のみならず東高生の気質に大きな影響を与えた。俊三らが生み出した「がんばっていきましょい」の言葉は、40年の時を経た今でも、清らかに燃える東高魂の象徴となっている。俊三は古豪復活に情熱を捧げた。その熱血指導により徐々に力を取り戻した東高は、昭和39年坂本杯に準優勝する。以降、昭和40年代は新田・東高の二

強時代を築き上げる。昭和41〜50年の10年間において、四国大会Bブロックで8度優勝していることは特筆すべきことであろう。しかし新田の壁は厚かった。昭和30年代後半から40年代前半にかけて、全国大会でベスト4進出が2回、ベスト8が2回の全国的強豪となっていたのである。昭和38・39年以降、3年生が総体で引退する傾向が定着してしまったこともある。しかし昭和44年度、ついにその壁を破り岡部組が全国大会出場(4度目)を果たす。実に23年ぶりのことであった。岡部組はFWの平均体重が73kgという当時では大型チームであった。花園ラグビー場で開催された全国大会では西陵商と対戦し、6対10で惜しくも敗れ、悲願の1勝はならなかった。

昭和40年代後半は、大学受験のため総体で退部する生徒が多く、新人戦や四国大会では好成績を残すが、全国大会予選では決勝に進むこともなくなってしまった。この間、昭和49年には高橋俊三が松山西高に去り、新しく井手盛章(昭和43卒)が監督に就任する。東高で俊三の指導を受けた井手も俊三と同じく情熱的な指導を行った。昭和50年の仙波組は、新人戦、四国大会Bブロック、総体で優勝を遂げる。3年生がそのま



昭和45年1月 花園ラグビー場 23年ぶりの全国大会出場
前列左から、杉原、金岡、立花、岡部、大窪、武智(一)。後列左から、須之内、江戸(利)、石田、中川、相原、忽那、西原、石崎、野本。

ま続けたら花園も決して夢ではなかったであろう。しかし、やはり多くの3年生が総体で引退してしまい、夢は叶わなかった。昭和50年代前半は再びやや力が衰え、四国大会でも優勝できなくなってしまう。わずかに昭和56年にBブロックで優勝しているのみである。しかしながら、この時期

の新田は向井省吾や栗原誠治といった後の日本代表や、高校代表(栗原以外に村上、亀岡、河野、渡部)を輩出した時代である。当時の東高はその新田と幾度となく接戦を演じており、相応の実力を保持していたことが伺える。

昭和50年代半ば以降は極端に力が低下してしまう。春の大会でも県決勝に残ることが少なくなってしまう。その低迷期に監督に就任したのが三輪田元敬(昭和36卒)である。昭和62年に母校に赴任した三輪田は、すぐさま昭和63年に初の四国大会Aブロック優勝を勝ち取る。さらには、東高生の特徴を活かした戦術を思案しFWのモールプレーを徹底的に鍛えあげた。そして平成3年には新居久直という優れたスキッパーを有したこともあり、新人戦、四国大会Aブロック、総体で優勝する。新人戦、総体での優勝は、仙波組以来16年ぶりのことであった。このチームなら花園出場も可能ではなかったと思われるが、残念ながら新居組もまた、秋の大会まで残った3年生は3人。全国大会出場はならなかった。ちなみに、三輪田元敬は前出の三輪田綱丸の実弟である。

平成4年以降、東高は再び長期に渡って

低迷してしまう。部員が15名しかおらず、新人戦の出場も危うかった時代も経験する。その長期低迷に復活の兆しが見え始めたのは、平成13年のことである。新人戦で久々に決勝へ進出したのである。そして翌年。

平成10年から始まった7人制四国大会で高松組が新田を破って優勝を遂げる。前年までであったらジャパンセブンス出場権を得られたのであるが、この年から大会方式が変わってしまった、久方ぶりの全国大会出場がならなかったのは残念であった。さらに高松組は四国大会Bブロックで21年ぶりに優勝する。Bでの優勝は、監督の栗林誠(昭和57卒)が選手として優勝して以来のことであった。翌平成15年の万代組は、個々の力量では高松組よりも劣ると見られた。しかし、万代の傑出したキャプテンシーとチームワークで好チームに仕上がった。見事12年ぶりの四国大会Aブロック優勝と総体優勝を勝ち取ったのである。

次に、個々の選手に目を転じよう。松中・東高が輩出した名選手というと、何と言っても尾崎政雄(昭和30卒)であろう。早稲田大・八幡製鉄でバックローとして活躍した尾崎は、日本代表の経歴も持つ(CAP2)。和泉武雄(昭和40卒)も優れたプレ



平成 15 年 6 月 徳島市球技場 松山東 29-14 土佐塾
四国大会Aブロック 12 年ぶり 3 回目の優勝
左から、児玉、佐伯、西尾、河野

回、総体 7 回であるのに対して、全国大会出場は 4 回と少ない。これは受験競争の激化が大きく影響していることは否定できない。花園を取るか受験を取るか、現役の葛藤は大きいことと思う。しかし OB としては、東高が再び全国大会に出場し活躍することを願っている。そのために、現役・OB・父兄とが一体となった体制を整えたい。そして、映画『ハリー・ポッターと賢者の石』に出てくるグリフィンボールの面々ように、臙脂と黄色のマフラーを巻いて花園ラグビー場で応援したいものだ。

(敬称略)

参考文献

愛媛ラグビー五十年

(愛媛県ラグビーフットボール協会)

松商ラグビー四十年 (松商ラグビー部)

青柳 (松山東高等学校生徒会)

紅もゆる丘の花 (本間重夫 (昭和 19 卒))

ザ・ワールドラグビー (大友信彦)

日本フットボール考古学会

(<http://www.officei.co.jp/rugbya-qui/>)

写真提供

大西 五郎 (昭和 13 四修)

河本 忠勝 (昭和 31 卒)

松崎 伸一 (昭和 57 卒)

ーヤーだった。早稲田大でフロンカーとして活躍し大学選手権で優勝している。大学卒業後は東海大で監督も務めた。この 2 人以外にも、大西辰居 (昭和 9 卒、慶応) や岡部憲治 (昭和 45 卒、同志社) など、名前を挙げるべき選手が多いが、誌面の都合上、別の機会に譲りたい。

別表に戦績をまとめた。各大会の優勝回数、新人戦 8 回、四国大会 A B 併せて 13

ラグビー部戦績

大会名	戦績		該当する卒業年
新人戦 (坂本杯)	優勝	8 回	S24, S25, S26, S32, S45, S47, S51, H4
	準優勝	12 回	S27, S28, S40, S42, S44, S46, S48, S50, S53, S55, H7, H14
四国大会	A ブロック優勝※1	3 回	H1, H4, H16
	B ブロック優勝※2	10 回	S42, S44, S45, S46, S47, S48, S50, S51, S57, H15
県総体	優勝	7 回	S30, S43, S45, S46, S51, H4, H16
	準優勝	10 回	S40, S41, S42, S47, S48, S50, S53, S55, S57, H3
全国大会	全国大会出場	4 回	S14, S15, S22, S45
	県優勝	11 回	S8, S9, S13, S14, S15, S18, S22, S23, S24, S25, S45
	県準優勝	13 回	S10, S11, S12, S16, S17, S30, S31, S33, S34, S41, S43, S44, S46

※1 ; 各県 1 位チームのトーナメント、※2 ; 各県 2 位チームのトーナメント

松山東高校ラグビー部 URL ; <http://221.114.166.75/rugby/>

慶応ラグーマン対談

大西 辰居（昭和9年卒）

桐山 雄臣（平成13年卒）

司会 小椋勇記夫（昭和32年卒）

小椋 大西さんは松中から慶応、桐山君は東高から慶応に進んだラグーマンですけど、そもそもラグビーを始めたきっかけは何だったのですか？

大西 藤井謙三先生に勧められてだなあ。中2の時にはサッカーでもやろうかなと思ってたんだけど、藤井先生に誘われて3年からラグビー始めて4年になったら必死になってやってたよ。

桐山 僕はオヤジが法政でやってたので、その影響ですね。ラグビースクールから始めました。

小椋 私の時代は学校の狭いグラウンドで、野球、サッカー、ソフトボールと一緒に練習してたんですが、松中時代はどうでした？

大西 最初は学校のグラウンドでやってたんだけどね、野球のボールが飛んでくるので危ないっていうので、道後のグラウンドに行く事になったんだよ。祝谷の常信寺のところだ。学校から毎日走って行った

ものさ。藤井先生が後ろから追っかけてくるからさぼる事ができない。で、練習が終わったら、また走って帰ってくる。

小椋 桐山さんの時は？

桐山 小椋先輩の時と同じで学校のグラウンドでやりました。野球、サッカー、ハンドボールと一緒にしたね。よく野球のボールが飛んできてました。

大西 練習はきつくて、いやでいやでたまらなかったよ。学校から出合橋まで走って行って帰ってきたこともあったなあ。二宮晋二さんは、走って体を作らないとだめだっていう教え方だったよ。

小椋 私の時は城山の石段を毎日駆け上がってました。ダッシュしたり、うさぎ跳びしたり。でも途中で3人くらいはいなくなるんですよ。だけど練習が終わる頃にはひよこつと出てくる。

大西 東雲神社の階段かい？ 私らもたまに県庁の裏から城山に登ってたよ。練習は厳しかったけど、我々の時のラグビーは、楽しい楽しいものだったよ。藤井先生の家が御宝町にあつて、よく練習の帰りにたらふく飯を食べさせてもらったなあ。

小椋 私の時には、学校の近くにたいこま

ん屋だったか、そば屋だったかがあつて、ラグビー部はよくかわいがってもらってた。

大西 正門を出て松商の方へ行つて、文房具屋の隣にあつたところ・・・。

小椋 そうです、そうです。よくツケで食べさせてもらってましたよ。で、お袋が怒りながらそのツケを払いに行ってくれた。（一同爆笑）

桐山 僕の時はまだか食堂でしたね。よく定食をまけてくれました。



平成16年1月31日 大西さんのご自宅で対談
ご自宅の部屋の壁には慶応のペナント類がびっしり。
東高ラグビー部の小旗も飾られてました。



昭和11年1月30日[神宮競技場] 慶応-NZ 学生代表
慶応の右から2人目の選手が大西さん。1番プロップで出場。

小椋 ところで松中時代の戦績はどうだったんですか？

大西 愛媛師範に勝って四国大会で徳島に連れていってもらったんだけど、脇町中に負けてねえ。確か1トライか1ペナルティか何かで、0対3だったかな。口惜しかったなあ。

小椋 桐山さんの時は？

桐山 チームとしてはベスト4でしたが、

個人的にはオール愛媛に選ばれました。小椋 慶応に進んでからの話を伺いましょう。

大西 私が入った時には、まだ日吉のグラウンドがなくて、目蒲線の武蔵新田で練習してたんだよ。私は、予科1年のときからたまたま本チャンの試合に出ることができてねえ。東京高商との試合が初試合だった。その試合の前の晩にマネージャーが黒黄ジャージを持ってやってきて、「予科1年で1本目の試合に出るなんて大変なことだ。頭を下げて拜んで頂け」なんて言うんだよ。昭和11年にニュージランド学生代表が遠征してきて、慶応が対戦したんだけど、その試合にも出させてもらった。(写真上)

桐山 ニュージランド。「新西蘭」ですか。

小椋 大西さんの他に松中を出て慶応に行つてラグビーをやった人はいるんですか？

大西 私の知っている範囲ではないなあ。

桐山 東高から慶応蹴球部に入ったのは、戦後では僕が初めてだと聞いてます。

小椋 じゃ、桐山さんは大西先輩以来の慶応ラグーマンなのかな。ところで桐山さん、今、慶応の部員はどのくらいいるの？



慶応のブレザーを着てがっちり握手。大西さんは黒黄会(OB会)のネクタイ。桐山さんは現役のネクタイ。

桐山 110人います。

小椋 その中でのレギュラー争いは大変だ。今、どの辺にいるの？

桐山 昨年は対抗戦のリザーブには入ったんですが、試合には出られなかったです。

小椋 そいつはすごい。来年楽しみですよ、大西さん。彼、出てきますよ。

大西 応援させてもらうよ。がんばってね。

桐山 はい。ありがとうございます。がんばります。

ラグビーの真髄

尾崎 政雄（昭和30年卒）

和田 憲明（昭和30年卒）

司会 小椋勇記夫（昭和32年卒）

小椋 尾崎さんは東高から早稲田へ、和田さんは青学へ進学してラグビーを続けられたんだけど、当時のラグビーと今のラグビーの違いは？

尾崎 我々がやっていた頃のラグビーはオールラウンド・ラグビーで、遠いところで勝負するラグビーだった。相手が1m走るならば1.2m走って勝とうとしたんだ。近代ラグビーはボールを持ったらFWに近いところでゲインを切る。自分は0.8mで相手に1m走らせて勝とうとする。効率的なラグビーに変ったよ。

和田 レフリーやっていた真下（現日本ラグビーフットボール協会専務理事）が言っていたけど、今のラグビーは「ぎしぎし」って音がするんだそうだ。当りがきついのだろう。

小椋 我々の頃はゲインラインなんて言葉はなかったけれど、今は重要ですか？

尾崎 うん。今は効率的な攻撃をしようとするからね。世の中自身がそうだから。

小椋 正月の高校ラグビーご覧になりましたか？ 啓光学園が3連覇しましたけど。

和田 今の高校生はすごいよ。啓光のラックへの突っ込みなんかすごい。めぐりあげるように突っ込むんだもの。

尾崎 啓光は組織ディフェンスがしっかりしていたね。誰がどこを止めるかという事を徹底的に教育している。近代ラグビーは「攻撃は最大の防御なり」でアタック有利だけど、啓光は攻撃型の選手を揃えてディフェンスするんだ。監督がしっかりしている。すごい監督だと思うよ。

小椋 高校ラグビーっていうのは、やはり監督のウエイトが高いのでしょうか？

尾崎 高校生レベルでは監督のウエイトは高いよ。野球では9割。ラグビーでは3割かそれ以下。でも、普段の練習やポジション決めなど、監督の考え方はものすごく影響している。高校生は、いい指導者につけば才能を引き出すことができる。大学生に近いプレーをする事ができるんだ。監督はラグビーに対してしっかりした考え方を持っていないといけないね。カリスマ性が必要だ。信念と指導力と選手的能力を見る目を持った人物、そういう人でないといけない。

小椋 我々の時の指導者というと、三輪田さん「三輪田綱丸（昭和29年卒）」の名前がまず浮かぶよね。

和田 三輪田さんは我々に展開ラグビーを教えてくれた。技術的にすごいよ。上級生の中ではかけがえのない人だった。

尾崎 「紳士たれ」というのを教えてくれたね。相手のミスに手をたたいて喜ぼうものならゲンコツが飛んできた。そういった姿勢に魅力を感じたよ。

和田 それと川邊さん「川邊八郎（昭和15年卒・故人）」と丹下さん「丹下孝三（昭和23年卒）」。川邊さんと丹下さんがいて初めて我々があつたと思うよ。

小椋 話は変わりますが、ラグビーの魅力って何でしょう？

尾崎 ラグビーの魅力は戦いなんだよ。戦いの中のサポート。味方が困った時には助けてやって、チャンスの時にはフォロワーしてやる。僕がトライ・ゲッターだったのは、そういうことをやっていたからなんだ。そういうことを当たり前のようになら。そういうことを当たり前のように続けていたら、味方が自然と頼りにしてくるさ。社会の中の組織も一緒だよ。そういう組織でないと、会社も強くないし、経営的効率も上がらない。そう

したコンビネーション、組織力が大事な
んだ。サインプレーなんてコンビネーシ
ョンでも何でもない。今の世界のラグビ
ーは、流れの中でそういったコンビネー
ションを取れる。でも、日本のラグビー
は決め事でないといけない。

小椋 この前のワールドカップ（以下WC
と表記）でジャパン（日本代表）は、前
半はいい勝負するんだけど、後半はやら
れてしまう。どうしてでしょう？

尾崎 スタミナの問題もあるけれど、僕が
ジャパンで出た時にはその試合で死んで
もいいと思ってグラウンドにでた。でも選
手の中にはそうでないやつもいた。日の
丸を背負っているにも係わらず根性持っ
てないやつがいたんだよ。だからニュー
ジーランドコルツに負けてしまった。闘
争心がないとラグビーというスポーツで
は生きていけないんだ。今度のジャパ
ンもその時から進歩していかないのさ。

小椋 そういうメンタリティが大事だと。
尾崎 そう。練習で疲れて動けない時に、
意識してどれだけ練習に取り組めるかが
大事なんだ。選手が伸びるか伸びないか
の差はそこにある。死に物狂いでやって
ないから伸びないし、試合で力を発揮で

きない。東高から早稲田に入った時には、
技術的にも精神的にも力の差をいやとい
う程見せつけられた。東高では言わば「仲
間のラグビー」をやっていた。それはそ
れでいいんだけど、早稲田のラグビーは
違ってた。格闘技だった。あきれたよ。
でもあきれると同時に、「よし挑戦してや
ろう」と思った。それからは人のプレー
を見て食欲に学んだよ。そしていいプレ
ーを身につけようとした。早稲田で1年
生の時、30分ゲームが週に18ゲームあつ
ただけど、そのうち1回しか使っても
らえなかった。だから試合に出たときに
は、とにかくボールを持って前に出た。
パスしたら自分の技術にならない。だか
らパスをせずつて行くところまで行った。で
もボールは必ず生かした。監督の西野さ
んはそういうところを評価して僕を1本
目に選んでくれたのかなあ。そういう風
にして大学時代に見る事の大切さを悟つ
た。だから早くWCを招致して実物を若
い選手に見せたいんだ。僕は森元総理と
親しくて、15年にWCを日本誘致するな
んて話が最初出た時に、「もつと早くや
れ」、「早く本物を見せないといけないん
だ」と森に言っちゃったんだ。そしてたら

11年に誘致する方向で話が進んでいる。
和田 11年にWCを招致する。今、尾崎が
熱を入れてやっているんだ。協会関係者
に働きかけているんだよ。

尾崎 ラグビーは、何よりもまず闘争心。
そして、いい指導者と試合を見る機会。
これが整えば全国で戦えるレベルになる
んだ。

小椋 なるほど、奥が深いですね。本日は、
貴重な話を沢山頂戴しましてどうもあり
がとうございました。



左から、尾崎さん、小椋さん、和田さん。
平成16年2月4日 セルリアンタワー東急ホテルにて対談

松山東高ラグビー部の思い出

須之内 辰雄（昭和46年卒）

平成16年1月19日、自宅に戻りメールチェックをすると、松山東高ラグビー部の後輩からのメールがあった。関東明教第5号でラグビー部特集を組むとのこと。原稿執筆の依頼である。気軽に引き受けた自分を呪いながら、今から30年以上前の我が松山東高ラグビー部時代の思い出を綴ってみる。

私は、昭和43年4月、松山東高に入学した。興味はあったものの小柄な私はとてもラグビーなんか無理と思っていたが、当時のラグビー部監督の高橋俊三先生に勧められ、最初はマネージャーとして入部した。同期のラグビー部員には、3年時に主将となった野本和男君、石崎 貴君、中川泰彦君、西原祥二君、多川 晶君、赤松民康君らがい

た。当時の部室は体育館の地下にあり、初めて入った時はその汚さと汗のしみこんだジャージの臭いに閉口（閉鼻？）したが、不思議なことすぐに慣れてしまった。ちなみに、隣の部室は同じ県内強豪でありながら、その清潔感では対照的なダンス部であった。

マネージャーとして活動のかたわら、練習を見ているうちに自分もプレーをしたくなり、選手を目指して練習に励むことになった。しかし、最初はランパス（今でもこの言葉を使っているかどうか不明だが）だけでも他の部員について行くのが精一杯だった。おまけに、身体作りのためだと、砂を詰めた救命胴衣をつけて走らされたりしたので本当にきつかった。

当時の練習相手と言えば、県内ではもっぱら、愛媛大や松山商科大（現松山大）であった。県外では山口農高や大分舞鶴高と練習試合を行いチーム力の向上を図った。

松山東高ラグビー部時代の思い出としては、次の二つのことが最も心に残っている。

一つ目は何といっても昭和44年度の全国大会出場である。昭和45年1月1日、私は7番右ランカーとして近鉄花園ラグビー場に立った。試合の中で今でも鮮明に覚えているのは、1回戦の対戦相手（西陵商高）の大型左ウイングをタックル一発で倒したことである。タックルしたあと、倒された左ウイングの選手が「ナイスタックル！」と私に声をかけてくれたのが今でも耳に残っている。残念ながら、試合結果は6対10（前半3対0、後半3対10）で惜敗

した。2日間ほど滞在して他の試合を観戦して帰るものと思っていたら、負けたチームはその日のうちに引き上げるという「不文律？」があるということで、元旦のその夜、関西汽船で松山に戻った。

もう一つは、同級生の中川泰彦君（通称、やっちゃん）のことである。昭和45年度全国大会の県予選、準決勝（対松山聖陵高戦）を快勝（32対11）したあと、やっちゃんは自転車を下宿（実家は面河）に戻る途中、車にはねられて意識不明となった。翌日にそのことを知った我々は、授業を抜け出し病院に駆けつけた。面河からご両親も来られていたが、やっちゃんは一度も意識を回復することなく、事故から数日後に18歳の短い生涯を閉じた。次の日曜日に行われた決勝戦では、ジャージに喪章をつけて新田高との試合に臨んだが、2年連続の全国大会出場とはならなかった。やっちゃんはその事故に遭っていなければ、大学でも活躍したに違いない。

このように松山東高ラグビー部時代には、うれしかったこと、苦しかったこと、悲しかったこと、といういろいろあったが、今となってはどれも懐かしい思い出である。

四国大会Aブロック初優勝チームの実情

矢野 良知(平成元年卒)

今からさかのぼること16年前、昭和63年5月の大型連休。我がチームは決勝で阿波高校に勝利し、四国大会Aブロックでの初優勝を果たした。優勝にいたる当時のチームを取り巻く実情を振り返ってみたい。

1年生でラグビー部に入部して一番驚いたのは、ボールの磨き方だった。当時はまだ皮のボールで、入部直後、2年生の先輩からボールの磨き方を教わった。先輩は「いか。こうするんやで」と言って、いきなりボールに唾を吐きかけた。カルチャーショックだった。球技を行う者はボールの上に座ったりしてはいけないと教えられていた。そのボールにこともあろうに唾を吐きかけたのだ。上から見て縫い目を右側にし、上から下に唾を伸ばす。練習後の唾を搾り出して磨いた。今でも、靴の皮が傷つくと思わず唾を付けてしまう自分に気づき、当時を懐かしく思い出す。

1年生への恒例行事がキックダッシュだ。3年生がボールを出来るだけ遠くに蹴る。そのボールを1年生が全力疾走で取りに行き、戻ってきて3年生に手渡す。まるで猟

犬だ。ヘトヘトになった練習の後なので、きつく、何でこんなことをと思ったものだ。しかし3年生になり、気がつけば自分もボールを蹴っていた。

グラウンドでの敵は、野球部とサッカー部、そしてハンドボール部だった。特に野球部の打撃練習は、あたかもラグビー部を狙っているかのようなものだった。硬球が足元に落ちたり、頭の上をかすめて通ったりしたことも一度や二度ではなかった。しかし、2年生の四国大会予選で勝ち進むうちに事態は少しずつ変わっていった。ラグビー部の練習場所は少しずつ陣地を広げ、ボールが飛んでくることも少なくなった。

こうして迎えたのが、四国大会出場をかけた決勝での北条高校戦だった。この試合が四国大会Aブロック初優勝への鍵になった試合だ。それまでチームは、練習試合も含め6連勝と好調を維持し、チーム内には裏付けのない自信がみなぎっていた。場所は堀之内。試合はリードされる展開だったが、後半、トライを取って10対10の同点に追いつき、そのままノーサイドをむかえた。主将がくじ引きで、勝利の切符を手にし、四国大会行きが決定した。その後、すでに出場を決めていた八幡浜高校との試合に

29対0で快勝し、Aブロック代表を獲得した。東高ラグビー部初のA代表と言うこともあり、多くのOBの方々に喜んでもらえることを記憶している。四国大会では、それまでの試合よりも楽に勝った印象が強い。なぜ優勝が出来たのかと聞かれたら私はこう答える。「自信と運」。



四国大会Aブロック1回戦 松山東 21-4 坂出工
グラウンドは愛媛県運動公園球技場 雨中の熱戦
決勝戦では19-9で阿波を下し、Aブロック初優勝を飾る